



# 思いやりの心

致知出版社 社長  
JHMA会員 藤尾 秀昭



有名な「論語」という本の中にこういう一節がある。

《子貢問ひて曰く、一言にして以て終身之を行ふ可き者有りやと。子曰く、其れ恕か。己の欲せざる所は、人に施すこと勿れと》

子貢は孔子の三十一歳年下の弟子。その子貢が「先生、たった一語で、一生それを守れば間違いない人生が送れる、そういう言葉がありますか」と質問した。孔子は「それは恕——（思いやりの心）かな」と答え、自分がされたくないことは人にしてはならない、それが恕だと説いた。自分のことと同じように人のことを考える。この思いやりの心こそ、人生で一番大切なものと孔子は教えたのである。

この逸話で私には強烈に思い出される人がいる。暫く前故人になられた住友生命名誉会長・新井正明さんである。

新井さんに初めてお会いしたのは、かれこれ二十年以上前に遡る。私が編集に携わる月刊誌「致知」の取材でお訪ねしたのだった。

戦前、新井さんは召集を受け、ノモンハン事件で右脚を

付け根から切断する戦傷を負われた。二十七歳だった。

それは新井さんが人格陶冶の道を歩まれる始まりでもあった。安岡正篤先生に師事し、古典に学び、先賢の教えに分け入って、ご自分を磨かれたのである。

一方、住友生命でのご活躍は目を見張るものがあった。隻脚の身で陣頭指揮を取られ、当時業界八位だった住友生命を三位に押し上げる原動力になられたのである。

そういう話を聞いていたので、お会いする前の私は少なからず緊張していた。厳格にして精悍、そんな風貌を予想していたのである。

ところが実際の新井さんは春風駘蕩、溢れる情熱を温顔に包まれて、穏やかに話される方だった。私はそのお人柄に魅せられ、ご懇意を願うようになったのである。

以来、月に一度は大阪の住友生命本社に伺い、経営上の重要な事柄から業務上の些事まで、判断に迷うことをご相談申し上げるのが一種の習慣になった。新井さんはどんな多忙な時でも真剣に耳を傾け、

適切に対応して下さいました。

ある時、雑談の折に新井さんがふと漏らされた。義足を始めた右足の付け根が常に痛みにうづくのだという。ことに立ったり座ったりする時の痛みは耐え難いという。だが、顔をしかめていては社員が気にするし、いい影響はない人に辛い思いをさせることもなる。だから、決して痛みを悟られぬようにしているとのことだった。

私は驚いた。私自身、右脚が痛いなどという事に一度も思いをはせたことがなかったからである。新井さんの立ち振る舞いがそういうことを感じさせなかったのである。

私は新井さんの克己心の強さに感動し、このことを雑誌に載せる原稿に書いた。念のため新井さんに原稿を見ていただいたところ、この部分がバツサリ削られていた。赤く棒を引かれたその部分を前に私は襟を正さずにはいられなかった。

佐藤一斎の『言志後録』にある「春風を以て人に接し、秋霜を以て自ら肅む」という一句をそのまま体现されている

新井さんの修養の深さをそこに見たのである。

新井さんがよく口にされていた『易经』の言葉がある。《天行は健なり、君子は以て自ら強めて息まず》

天の運行は休むことなく正しく進んでいく。リーダーたる者も同様に、自分のなすべきことを孜孜として努め、休むことなく努力しなければならぬ。そういう意である。自分の痛みを人に悟られ、

悪い影響を与えたり辛い思いをさせたりしてはならない——新井さんが「自ら強めて息まなかつたものこそ、思いやりの心に違いない。

思いやりとは自己修養によって獲得される人間性の核である。私も及ばずながら、と思わずにはいられない。

## JHMA推薦図書

人間学誌「致知」で一道を切り開いてこられた藤尾秀昭氏。「人生をいかに生きるのか」のヒントを与えてくれる感動の1冊です。

小さな人生論

藤尾 秀昭

心の持ちようを決定する22の人間学講座「致知」の1冊目  
人は何のために生きるのか  
人はどう生きたらよいのか

●定価/1,050円(税込) ●藤尾秀昭 著